

日本 ～苦境が続く日本経済～



経済調査部 副主任エコノミスト 高橋 大輝 (たかはし だいき)

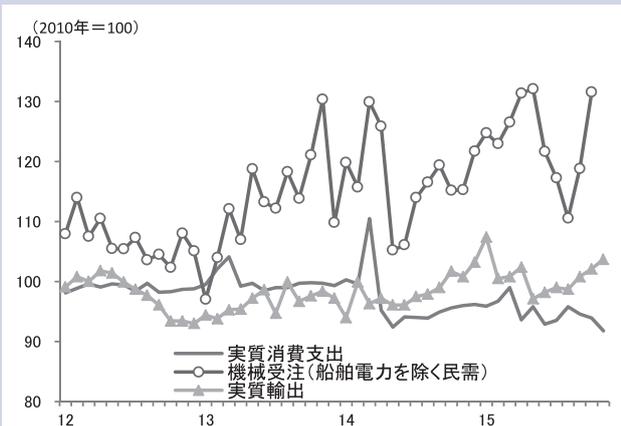
強弱入り混じる足元の指標

足元の経済指標をみると、一部に明るさが見られるものが出てきた。一つ目は機械受注だ。設備投資に先行する機械受注は、9月、10月と大幅増加し、6月以降の減少分を取り戻した。二つ目は、実質輸出である。実質輸出は9～11月まで3ヶ月連続で明確な増加が続き、水準も夏以前から大きく切り上がっている。

一方で、消費については引き続き停滞している。11月の実質消費支出は前月比▲2.2%と大幅減少、水準で見ても増税直後の反動減が色濃く残っていた2014年5月の水準を下回るなど、不振を極めている。商業動態統計の結果も合わせて見れば、個人消費がここまで悪化しているとは考えにくい、停滞が続いていることは確かだろう。また、鉱工業生産についても、足元でようやく下げ止まりつつあるものの、明確な持ち直しが確認できるほどの状況ではない。

輸出や設備投資については、低調に推移した夏場に比べ持ち直しが見られるものの、消費が引き続き弱いこと、在庫水準が高いことなどを背景に生産活動が持ち直しに転じるには至っておらず、景気全体ではようやく底が見えつつあるという状況だ。

資料1 各種経済指標



(出所)総務省、内閣府、日本銀行

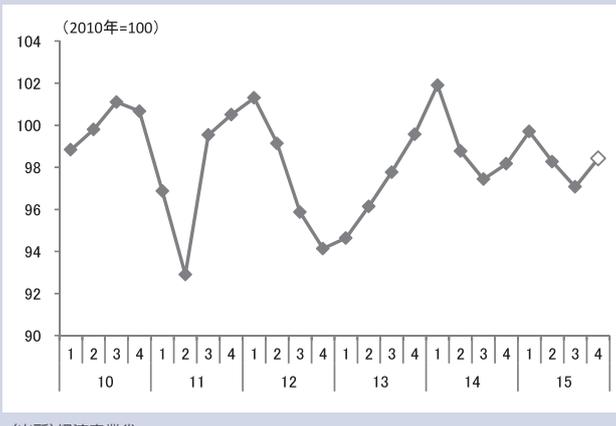
先行きもまだまだ慎重にみざるを得ない

先行きについても、楽観できる状況ではない。まず消費については、執筆時点で確認できる12月の業界統計は横ばい圏の推移に留まっている。鉱工業生産についても、12月の予測指数は前月比+0.9%となっており、これが達成されれば10-12月期は前期比+1.3%と、1-3月期以来の増産となる。ただし、予測指数は下振れやすく、10-12月期は小幅プラスといったところに落ち着きそうだ。4-6、7-9月期と減産が続いた後であることを考えれば、物足りない結果になりそうだ。

足元で明るさが見えていた機械受注についても楽観は禁物だ。11月までの増加は、一部業種の大幅増加による押し上げが大きく、全体的な回復ではない。工作機械受注が軟調な推移を続けていることも懸念材料だ。海外景気にも不安が残る中、実質輸出が、今後もこれまでのような増加ペースを維持できるかどうか不明感がある。

日本経済は最悪期を脱しつつあるものの、先行きに自信を持てるほどの状況ではない。各種設備投資計画は強いが設備投資が計画通りに実現するのか、海外経済は回復を続けられるのか、ここを持ちこたえて、再び回復基調を強めていけるか、景気は正念場を迎えている。

資料2 鉱工業生産指数



(出所)経済産業省
(注)最新値は12月予測指数を用いて延長した